

## VI 先端をゆく商業建築：楽しむまちミナミ・心齋橋 とその周辺

町衆のまち・船場に対して、ミナミは商業のまちという明確なアイデンティティをもっている。近世には、道頓堀五座と芝居茶屋で構成されるエンターテイメントのまちを起源として、南地五花街（宗右衛門町、九郎衛門町、櫓町、坂町、難波新地）といった遊興街としての顔とともに、心齋橋筋には松屋（大丸呉服店）、十河呉服店などが軒を連ね、買物のまちとしての顔も持っていた。こうしたまちの構造が、今日の日本を代表する繁華街であるミナミの礎を築いている。

その商業のまち・ミナミのイメージをより強化したのが、百貨店建築の集積だ。近代という時代に呉服店から百貨店という業態へと競うように転換をはかった流れのなか、**大丸心齋橋店本館**（1922～1933年：ヴォーリズ建築事務所〔ウィリアム・メレル・ヴォーリズ〕）やそごうが心齋橋に店を構える。この動きは、梅田阪急、南海難波など郊外ターミナル駅周辺にも広がる。当時、御堂筋（1937年竣工）とその地下を走る地下鉄御堂筋線（1935年竣工）の工事が進むミナミでは、難波駅と一体的に計画された**南海ビル「高島屋大阪店ほか」**（1932年：久野節建築事務所）、当初は松坂屋大阪店であった**高島屋東別館**（1934年：鈴木建築事務所〔鈴木禎次〕）と、その豪華な装飾と近代的な設備を整えた百貨店建築の集積が進んだ。そして、カフェやキャバレー、映画館など、様々な新しい業態に対応した建築も生まれ、ミナミは都心・郊外の住民が買物・食事・映画・芝居で一日を過ごすというモダンなライフスタイルが確立していった。

こうして、都市型レジャーのまち、新しいものが生まれるまちとしての地位を確立したミナミは、戦後復興期を乗り越え、高度経済成長期になって再び勢いを取り戻す。カフェに対して酒類を扱わない新業態として発展した喫茶店・パーラー建築である**純喫茶アメリカン**（1963年：富士工務店）が生まれた。少し場所は離れるが、同じく流行先端地であった新世界では、現在ギャラリーとして活用されている、建築家石井修が独創的なディテールをこらした喫茶店**再会**（1953年）が誕生した。

また、当時としては画期的な焼肉レストランの**食道園宗右衛門町本店ビル**（1968年：生美術建築デザイン研究所〔生山高資〕）やモダンで奇抜なデザインで地下にキャバレーユニバースを備えた新しい複合商業ビルをつくりあげた**味園ユニバースビル**（1955年：志井銀次郎）など、時代をリードする業態の先駆けとなった複合商業建築も登場した。

繁華街としてのミナミは、やがて先端のまちというイメージも獲得していく。村野藤吾がそのファサードデザインに全力を注いだ**浪花組本社ビル**（1964年）はミナミだけ

らこそじっくりくる。

大阪を代表する建築家・安藤忠雄が主に 80 年代に手がけたのも先端商業建築だ。そのいくつかはガレリアアッカ（1988 年）をはじめ、ミナミに点在している。この頃から、まちの先端性や流行発信の拠点としてその魅力が注目されはじめ、建築がその象徴としての役割を担うようになっていく。ミナミ・心齋橋からその動きは、アメリカ村、堀江へと周辺に広がりを見せしていく。堀江にあるオーガニックビル（1993 年：ガエタノ・ペッシェ）はその奇抜なデザインで、まちのシンボルとなっている。

このように多様化をみせつつ、次々と新しいものが生まれ、代謝を繰り返す先端建築のバイタリティはまちの魅力と重なりあって、広がり、厚みを増していく。

大阪球場跡に建つ屋上庭園をもったなんばパークス、グリコネオンが水面に光る水辺遊歩道のとんぼりリバーウォーク、百貨店建築の代表作である南海ビル [高島屋大阪店ほか] のリニューアル整備など、商業のまちミナミはその回遊性を高めつつ、さらに楽しむ都市として発展を続けている。（嘉名光市）

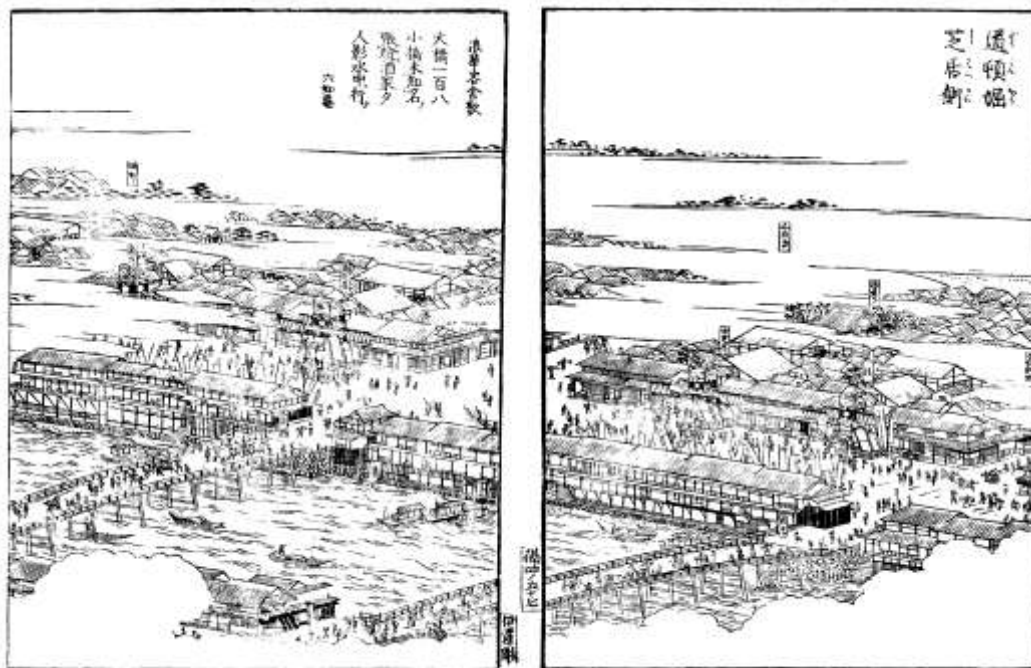


図 道頓堀芝居側（出所 撰津名所図会）



写真 道頓堀 (出所 大大阪の展望 FINE VIEWS OF OSAKA)

天井や柱といった内部の装飾も見事な  
大阪を代表するアール・デコ建築の傑作

---

## 36 大丸心齋橋店本館



アメリカ生まれの建築家ウィリアム・メレル・ヴォーリズが設計を手がけたデパートの名作。とりわけ教会や学校、住宅といった人々が集う空間の設計の巧さには定評がある彼らしく、北西角の塔から玄関上部のレリーフ、内部装飾に至るまで、華やかな演出によって来客者の気分を盛り立てている。当初からの改変も全体の雰囲気尊重している。アール・デコの装飾の下では、今日も市民が行き交う。消費の街・大阪に無くてはならない存在だ。(倉方俊輔)

旧 称：大丸百貨店大阪店  
所在地：大阪市中央区心齋橋筋 1-7-1  
建設年：1922～1933 年  
構造・規模：RC 造 7 階、地下 2 階（後年に 8 階増築）  
設 計：ヴォーリズ建築事務所（ウィリアム・メレル・ヴォーリズ）

御堂筋のミナミの極にあるターミナルビル  
増床とリニューアルで活用

## 37 南海ビル [高島屋大阪店ほか]



日本を代表する大通り・御堂筋を南端で受け止めているにふさわしい壮観だ。長い壁面を16本のコリント式壁柱とアーチで整えたデザインに、戦前期に多くの大規模建築を手がけ、中でも鉄道駅や百貨店を得意とした建築家・久野節の手腕が光る。南海鉄道（現南海電気鉄道）が建設したターミナルビルに高島屋が入居したもので、昭和初期に拡張された御堂筋が大阪のメインストリートとしての地位を築いたことを物語っている。近年、当初の外観を尊重した大改修が行われた。鉄道と百貨店が人々の生活を変えていった昭和時代の象徴は、今も過去の建物を大事にしながら結節点としての機能を果たしている。（倉方俊輔）

所在地：大阪市中央区難波5-1-60  
建設年：1932年  
構造・規模：SRC造7階、地下2階  
設計：久野節建築事務所

元松坂屋大阪店の建物

NHK朝ドラでは主人公が通う心齋橋のデパートに

---

## 38 高島屋東別館



堺筋に面して日本橋に建つ高島屋の東別館は、そもそもは昭和のはじめに松坂屋として建てられた。大阪は1937年に御堂筋が完成するまで、堺筋が随一の大通りで、百貨店がこぞって出店したきらびやかなショッピングストリートであった。設計をしたのは名古屋に事務所を構えて松坂屋の設計を数多くこなした鈴木禎次（ていじ）。外観はクラシッくな3層構成で、何といっても堺筋に沿って続く67mものアーケード、11連のアーチが圧巻。内部もエレベーターとエレベーター廻りに濃密に装飾が施され、全体にアール・デコ調のデザインでまとめられている。かつては屋上に「松坂遊園」があり、夏はプール、冬はアイススケートで賑わった。（高岡伸一）

旧 称：松坂屋大阪店

所在地：大阪市浪速区日本橋 3-5-25

建設年：1928年～1937年

構造・規模：SRC造7階、地下2階

設 計：鈴木建築事務所（鈴木禎次）

ミナミ千日前に気品たかく佇む  
‘べっぴん’な店構え

## 39 純喫茶アメリカン



シアトル系カフェ全盛の現在、昭和時代の古き良き喫茶店が街から姿を消しつつある。喫茶店は、高度経済成長期の都市文化を語る上で欠かせない存在だ。昭和の雑踏が今も息づく千日前商店街に建つ純喫茶アメリカンは、戦後すぐの1946年に開店、木造だった店舗を1963年にビルへと建て替えた。オーナーは開店以来、売り上げの大部分を店の整備につぎ込んできたといい、フェスティバルホールの外壁を思わせる壁面の大きな彫刻レリーフや、優雅な曲線を描いて上る2階への階段など、どこを見ても昭和のモダンなデザインで、見る者を全く飽きさせない。(高岡伸一)

所在地：大阪市中央区道頓堀 1-7-4  
建設年：1963年  
構造・規模：RC造5階（一部6階）  
設計：富士工務店

ディテールにこだわりが感じられ、優雅なフォルムに溢れた  
知る人ぞ知る木造建築、一見の価値あり

---

## 40 ギャラリー再会

所在地：  
大阪市浪速区恵美須東 1-4-16  
建設年：1953 年  
構造・規模：木造 2 階  
設 計：石井修



1953 年に開業した喫茶店「再会」。1997 年に新たな持ち主の下で修復が施されて輝きを取り戻し、今も新世界に可憐な顔をのぞかせている。細部に対する深い愛情が、スペインの民家を思わせるロマンティックな佇まいに説得力を与えているのだろう。乳白色の壁を引き締める露出した木部には、丁寧な仕上げが端部までなされ、ひときわ目を引く 2 階のねじり柱は、わずかに湾曲させたヴェランダのタイルや手摺りの装飾に取り囲まれている。設計者は若き日の石井修。1970 年代以降、地形や植物などの自然環境と共存した作風で知られることになる建築家だ。内装から椅子・テーブル類まで逐一、石井が図面を描き、職人たちがつくり上げた。全国にも珍しい、美しく残された昭和 20 年代の民間建築は、夢と手仕事において豊かだった高度成長前の時代に再会させてくれる。

(倉方俊輔)



当時としては画期的な焼肉レストランの本店ビル  
万博開催時は焼肉弁当が評判に

## 41 食道園宗右衛門町本店ビル



現在の焼肉ブームの礎を築いた食道園の本店ビル。食道園は戦後まもなくの1946年、千日前通に面した木造の小さな建屋で創業したが、1970年の大阪万博を見越した千日前通の道路拡幅工事に伴って立ち退きを余儀なくされ、1968年に現在の宗右衛門町に本店ビルを建てた。設計したのは生（いく）美術建築デザイン研究所の生山高資。生山は北新地に事務所を構え、バーやスナック、ダンスホールや飲食店など商業建築のインテリアを得意とした建築家で、大阪キタの有名ダンスホール「ワールド」を設計した。1階のインテリアには、今もオリジナルのデザインがよく残っている。（高岡伸一）

所在地：大阪市中央区宗右衛門町 5-13  
建設年：1968年  
構造・規模：RC造6階、地下1階  
設計：生美術建築デザイン研究所（生山高資）

キャバレー閉店後、新しく若者による再評価が進む  
ミナミの大型レジャービル

## 42 味園ユニバースビル



昭和の夜を華やかに彩ったキャバレーも、その数は数えるほどとなった。1955年にオープンした味園のキャバレー「ユニバース」は、1962年の米LIFE誌に見開きで取り上げられ、1000人の客を飲み込む大空間は、「JAPAN'S BIGGEST CLUB」と紹介されて外国人観光客も多く訪れた。その後キャバレーは地下へと移り、ホテルやスナック街、サウナなど時代の要請に応じて改変を重ね、味園は総合レジャービルへと成長していった。残念ながらキャバレーは2011年に営業を終了したが、インテリアを活かしたイベント会場として人気を集め、ライブイベントなどが開催されて若者による再評価が進んでいる。

(高岡伸一)

所在地：大阪市中央区千日前 2-3-9  
建設年：1955年  
構造・規模：S造5階、地下1階  
設計：志井銀次郎

建築家・村野藤吾を支え続けた企業の本社ビル  
外観の自由なデザインに圧倒される

---

## 43 浪花組本社ビル



関西を代表する建築家・村野藤吾の「村野らしさ」を語ろうとすると、作品を依頼したクライアントや作品をつくった職人といった村野以外の人の話もしなければいけないところにある。本作はその代表格。大正時代から続く左官業者の本社で、浪花組は村野建築の左官工事に多く関わっているが、それだけでなく、建築家としての成長を後押ししたクライアントでもあった。社長の中川貢は数寄屋造の自邸、経営に関わった今は無き「心齋橋プランタン」、各地の本支店など、生涯に8つの建物を村野に依頼した。そんな信頼感と職人技を基盤に、村野作品の中でも一二を争う技巧的な外観が生まれた。他者とのコミュニケーションの中で個性を発揮した「村野らしさ」の象徴である。(倉方俊輔)

所在地：大阪市中央区東心齋橋 2-3-27  
建設年：1964 年  
構造・規模：SRC 造 5 階、地下 1 階  
設 計：村野・森建築事務所（村野藤吾）

「おもろいものをつくろう」×「自然との共生」  
オリジナリティ溢れる存在

---

## 44 オーガニックビル

所在地：  
大阪市中央区南船場 4-7-21  
建設年：1993 年  
構造・規模：SRC 造9階、地下1階  
設 計：ガエタノ・ペッシェ、  
UD コンサルタンツ



1986～91 年前後のいわゆる「バブル期」の発想の自由さを存分に伝える全国的にも数少ない建築。外壁に 132 個のポット（植木鉢）が取り付けられている。ポットの形は数種類、植えられた植物も数十種類のヴァリエーションがあるが、それ以上に多様なのは緑の枝振り。「緑化」と十把一絡げに片付けられるものでなく、植物も一つ一つが個性を持っていることに気づかされる。生命讃歌とも言える基本設計者のガエタノ・ペッシェの考え方は、内装のデザインにも遺憾なく発揮されている。バブル期には、全国で外国人デザイナーの起用が流行した。しかし、今や見る影も無いものも少なくない。そんな中で、江戸時代から続く昆布専門店の本社ビルとして建てられた本作は維持も良好。街に生き生きとした驚きを与え続けている。（倉方俊輔）